

多くの人たちに、人生のある時期に、新しく生まれ変わりたいと思うことがあるのではないのでしょうか。いままでの自分を変えたい、新しい自分になりたいと願って、何かをきっかけにして心機一転、頑張ります。でも、自分の意志や努力ではそれを続けていくことが難しいこともあるのではないのでしょうか。聖書の中で、神が教えてくださる「新しく生まれる」とはそういうことではありません。神が人を新しく生まれさせてくださいます。ニコデモとイエスの対話から、「新しく生まれる」ことについて知ることができます。

## 1. ニコデモの理解と限界（：1～4）

ニコデモはパリサイ人の一人で、ユダヤ人の議員でした。パリサイ人は神の律法をどう守れば良いかを細かく定めて、たくさんの規定を積み上げて、それを学び、忠実に守り、また人々に教えていました。それで、パリサイ人たちこそ神に従っていると思われていましたし、彼ら自身も自分たちこそ正しく、神に喜ばれていると思っていました。しかし、主イエスは彼らの内にある偽善を指摘して、白く塗った墓のようだと言いました。しかし、パリサイ人の中にもニコデモのように、自分を省み、救いの確信を持たないことを正直に認め、イエスの教えを受けたいと願っている人もいました。

そのニコデモが夜にイエスを訪ねて来ました。彼はユダヤの指導者の一人でしたから、慎重に行動する必要があったでしょう。また、昼間はイエスの周りに多くの人々が集まっていたので、夜に訪ねて来たのでしょう。

ニコデモはイエスを「先生」と呼びます。律法の教師であると尊敬を込めて呼んでいます。そして、偏見のない洞察力を持ち、イエスを「神のもとから来られた教師である」と受けとめています。イエスの行ったことを見て、また教えを聞いて、神がともにおられて働いていることがよく分かります。神が働かれている「しるし」だと言っています。

けれども、ニコデモにも限界がありました。主イエスは彼の求めていることを見抜いておられました。3 節。ニコデモが尋ねたわけではありませんが、主イエスは彼の求めていることを知っておられました。彼に必要なこと、そしてすべての人に必要なことを主イエスは告げます。新しく生まれなければならないことです。

ニコデモはイエスが告げていることの意味が分からなくて、困惑した様子です。4 節。神の国を見るには、もう一度生まれなければならないのか、もう一度生まれることなどできるのか。この疑問はニコデモだけでなく、私たちも同じように持つでしょう。

また、クリスチャンであっても、聖書で教えられているように自分が新しく生まれたということがよく分かっていない場合があります。あるいは、古い肉の性質に捕らわれていることがあって、自分は本当に新しく生まれたのだろうかと分からなくなることがあるかもしれません。

## 2. 新しく生まれるとは（：5～8）

5 節。主イエスは「新しく生まれる」ことを「水と御霊によって生まれる」と言い換えます。このことばは旧約聖書にある預言のみことばに基づいて主イエスが語られたと考えられます。エゼキエル 36 章 25～27 節。

後の時代に神は人にきよい水を振りかけ、神の霊を授けると約束しています。神の御業によって、新しい心を与えられ、頑なな「石の心」を取り除かれ、柔らかな「肉の心」を与えられます。すなわち、神から新しい霊を与えられ、自分中心の偶像礼拝をやめてきよめられ、神のみことばに従って生きるようになることです。そして、それは神がなさる御業であり、イスラエルがそれにふさわしいからとか努力したからではありません。神の恵みによる御業です。

ニコデモにはまだよく分からなかったでしょう。彼は信仰において熱心ではあっても、自分の努力によって律法を守ることが神の国に入る道だと信じて頑張ってきたからです。「肉によって生まれた者は肉です」ということばはそのようなことを表しています。「肉」は「御霊」に対立するものです。

しかし、そのような肉に生きる者も、御霊によって新しいいのちに生きることができるようになることが神の約束であり、恵みによる救いの御業なのです。「御霊によって生まれた者は霊です」。

しかし、御霊の働きは目に見えないのだから、どうしてそれが分かるのだろうと思うかもしれません。ニコデモもそう思ったようです。主イエスは御霊の働きを風のことを例にして説明しました。

7～8 節。「御霊」と訳されていることばは「霊」と「風」の両方を意味することばです。主イエスは風を例にして御霊の働きを説明します。風は人の目には直接的には見えません。でも、木の枝を揺らし、葉の音を起こすことで、風が吹いていることが分かります。そのように御霊の御業も、直接的には目に見えませんが、人が御霊によって生かされているならば、その人の生き方によって御霊の働きが分かれると教えているのです。

私たちが今生きているこの肉体のいのちも、それ自体を見ることはできません。でも、確かに心臓が動いて、身体が実際に働いているので、いのちがあることが分かります。同じように、神は信じる者の心に新しいいのちを与えてくださっていますが、そのことも新しいいのちが活動していることによって分かるのです。罪を悔い改め、救い主イエスを信じて、神を礼拝し、聖書を読み、祈るのは、その人の内にすでに御霊によって新しいいのちが与えられているからです。この新しいいのちによって、私たちは神のみことばに従って生きることができ、私たちを通して神があがめられるように生きることができるのです。

### 3. 上げられる人の子にあつて（：9～15）

まだニコデモはよく分かっていませんでした。御霊によらなければ神の真理は分からないのです。イエスは旧約聖書の中に記されているニコデモもよく知っている出来事を用いて教えます。民数記 21 章に記されている出来事です。モーセに導かれてエジプトから救い出されたイスラエル人は、神の数々の御業、恵みを経験したにもかかわらず、何度も神に背きました。不信仰のゆえに経験することになった荒野の 40 年の旅も終わりに近づいて、いよいよ約束の地に向かっている途中でも、エドム人の地を迂回しなければならないことになった時、民は我慢できなくなり、神とモーセに対して文句を言いました。そこで、神は蛇を送り、蛇にかまれた多くの人が死にました。その時、神のみことばに従ってモーセが青銅で蛇を作り、それを旗ざおの上に付けて掲げました。神は、「かまれた者はみな、それを仰ぎ見れば生きる」と仰せになりました。その約束を信じて、蛇にかまれても、その青銅の蛇を仰ぎ見た人たちは助かったのです。

14～15 節。罪のゆえに滅びなければならない人々を、新しいいのちを与えて生かして下さるために、主イエスは天から下って来られました。神の御子であり、人の子であるイエスが「上げられなければなりません」。ここで主イエスは、ご自分がすべての人の罪の身代わりになって十字架にかかること、三日目によみがえり、天に昇ることをすでにお語りになりました。罪のないお方がすべての人の罪を代わりに負って死なれること、そして死にも勝利してよみがえり、天に昇り、とりなして下さることによって、人に救いが与えられます。

そして、この「人の子にあつて永遠のいのちを持つ」ことができるのは、「信じる者」です。神のみことばを信じ、十字架に上げられ、よみがえって天に上げられたイエス・キリストを仰ぐときに、私たちは救われるのです。

ニコデモはイエスのことばを深く心に留めたことでしょう。やがて、イエスの十字架と復活に接し、このことばの意味が分かり、イエス・キリストを信じて、救いを確信し、教会で証したのだと思います。

十字架につけられた救い主イエス様を信じる者は、新しく生まれ、永遠のいのちを持つのです。そして、その人が救いを感謝し、神を礼拝し、みことばに従って生きようとしている姿こそ、御霊が働いておられ、新しく生まれたしるしなのです。

神はあなたの心にも働かれます。あなたがイエス・キリストを信じて、救われることを神は望んでおられます。上げられたキリストを仰ぐようにと招いているのです。

ヨハネ 3：16。イエス・キリストを信じて、みことばの約束通り、永遠のいのちをいただきましょう。新しく生まれ、新しいいのちに生きる者となるのです。

また、すでに救いをいただいている一人一人も、日々主との交わりを持ち、罪を悔い改め、みことばに従って歩みましょう。神の恵みを感謝し、イエス・キリストによる救いを感謝して生活しましょう。新しいいのちに生かされていることを証しましょう。